

「納得」を軸に考えを形成する 説明的文章指導の検討

——看護学における「納得の概念」を援用して——

松 本 圭 祐

1. はじめに

本研究は学習者が自分の考えを形成・深化する説明的文章指導の方法を「納得」に基づき実践し考察したものである。

国語科教育では「主体的・対話的で深い学び」の中で自分の考えを形成し深めることが重要な目標の一つとして挙げられている。富山（2017）では平成28年12月の中央審議会答申の「深い学び」を、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」ことと整理されており、ここに自分の考えの形成が示されている。また吉川（2013）では2001年から2010年における説的文章指導の特徴を、学習者の論理に基づき、批判的読み・評価読みなど筆者の意見に対して自分の意見をまとめることとして挙げている。この自分の考えを形成し深める指導において、有効な学習活動や方法について提案がなされているが、自分の考えを形成する過程や深い考えの定義など学習者側の論理に基づく検討は不十分である。考えの形成は学習者自身が教材や他者との対話など单元内の学習活動の成果として現れてくるもので、学習者の納得のいく基準は必ずしも教師側の基準と一致しない。

上記の問題を解決するために、本研究では学習者の論理に立った理論として看護学の「納得の概念」（今井，2016）に着目し、考えの形成・深化のための基準を考察する。この理論は看護・医療の分野の知見だが、教育系も含めた多様な先行研究を参照して構築されたものである。また看護学の「意思決定支援」理論（中山，2012、川崎，2017）にも着目すると、看護学では医師と患者の対話を通して、患者自身が最も納得のいく治療を選択する。

このように看護学に見られる「納得」のあり方を援用し、学習者が自分の考えを形成する過程を、実践を通して考察する。

2. 「納得」に関する先行研究

今井ら(2016)は「納得の概念」を、多様な学問領域からデータ収集を行い、納得を成立させる要素である「納得の属性」、納得を得る前の状態を表す「納得の先行要件」、納得を得た後の状態を表す「納得の帰結」の三つの観点から分析している。ここでは「納得の属性」に着目し、学習者が納得を通して自分の考えを形成・深化するための要素を検討する。今井らは「納得の属性」を8つのカテゴリーに分類している。

納得の属性	属性の概要
①理解の深化	わかったと思える度合いがより深くなることを表しており、いまもつ自分の理解に吟味や解釈を重ねてより深みのある理解へとつなげる
②感情的受容	自分の奥底から違和感なく腑に落ちるとともに、満足感や達成感といった肯定的感情を伴う受け入れ
③自己関与	自分の意志や行動、姿勢などの自己のありようであり、ある事象を自分の課題としてとらえ、それに能動的に関わること
④価値観	自分が育ってきた生活環境や社会文化といった個人の持つ背景に影響を受けながら、自分にとって有意味であると判断する個人的な基準
⑤相対的利益	事象の利益とリスクを比較し、事象の持つリスクを見越した上で、全体的な視点から自分への利益が存在すること
⑥明証性	根拠をもった確からしさがあり、疑いようなない明らかなことから自分のなかで疑義が生じない状況
⑦信頼関係	自分一人で作り出すものではなく、協調的關係やコミュニケーション、信頼できる情報提供を通して、他者と相互に影響しあうなかで構築される、信じて頼れる関係性
⑧流動的	静的なものではなく、プロセスに代表されるような変動する性質であること

これらの属性が納得を得るための要素とし、「納得」を以下のように定義している。

ある事象に対して、自分のもつ価値や自分への利益を明確にすることで理解を深め、認知的にも感情的にも受容した状態であり、主体的かつ他者との信頼関係のなかで生み出される流動的な状態

「納得の概念」は「自分」を基準とする概念であるが、この概念には「他者との信頼関係」が含まれており、「自分」を絶対的なものとしない。他者との関係を通して、吟味する内的プロセスを通じて形成される「自分」を軸とした概念と考えられる。

国語科教育と認知心理学における「納得」に着目すると、国語科教育では植山（2003）の説明的文章における「説得」に対する読者反応としての「納得」、辻村ら（2017）の「論理的納得」だけでなく、腑に落ちるという反応としての「感情的納得」が見られる。認知心理学では佐伯（1982）（1995）が指摘する「理解」との関係における「納得」であり、これは他者や社会との関わりを通じた理解として位置付けられている。

上述の「納得の概念」と国語科教育・認知心理学の「納得」を照らし合わせると、「理解の深化」、「感情的受容」、「信頼関係」、「明証性」が自分の考えを形成・深化するための土台となると考えられる。しかし、納得の要素は他にも挙げられており、他の納得の要素を組み入れることで一人一人の考えの形成・深化の質を高められるのではないかと考える。

3. 形成した自分の考えの分析・考察

3.1. 実践の概要

生徒が作成した意見文を「納得の属性」に着目して分析・考察を試みる。この意見文は「幻の魚は生きていた」（光村図書『国語1年』）を学習後、外来種や環境問題に関する映像を見て、「生態系の破壊」について考えたこと」という題で書かれたものである。対象・場所は京都教育大学附属桃山中学校1年（現3年）で、実践者はW教諭である。2017年2月に実践されたものである。分析対象は59名である。

3.2. 分析の方法

意見文の分析は、自分の考えの根拠に関わる【明証性】と自分との関わりから納得を考える【自己関与】の二つの属性に着目して行う。

説得性をもたせるという【明証性】の分析では学習者が自分の考えを形成するのに根拠とした内容を確認する。自分の問題として解決する【自己関与】は、学習者が取り上げた問題に対する「自分との関わり」に着目して分析する。分類基準は次のように設定した。

(1) 【明証性】…何を根拠に挙げているか。

- ①テキスト・メディアの意見を根拠として用いる。
- ②自分の既有認識を中心に根拠を挙げている。
- ③筆者やメディアの意見と自分の知識・経験を融合して根拠を挙げている。

(2) 【自己関与】…問題に対する責任性の有無。

- ①自分の問題として認識が不足している。
- ②自分が解決すべき問題として捉えており、問題解決案を提示している。
- ③自分が解決すべき問題として捉えており、自分の行動で問題解決を行う。

個々の属性と二つの属性の組み合わせで行い、そこから自分の考えの形成過程の特徴を考察する。上記の分類に基づき分析した結果が以下の図2である。

図2の結果から、学習者の考えの形成の特徴として【明証性】はテキストや映像などで学んだ認識を自分の考えを支える根拠として活用している。【自己関与】については、個々の問題としての認識が半数近く不足していることがわかる。残りの半数は、問題解決の観点から、自分なりの解決案や方向性を提示するという【自己関与】に基づく「納得」が多

明証性	自己関与	数値
①	①	18
①	②	19
①	③	7
②	①	5
②	②	3
②	③	0
③	①	3
③	②	3
③	③	1

図1 【明証性】と【自己関与】の関連性

	明証性		自己関与
①テキスト・メディアの意見を根拠として用いる	44	①自分の問題として認識が不足している。	26
②自分の既有認識を中心に根拠を挙げている。	8	②自分が解決すべき問題として捉えており、問題解決案を提示している。	25
③筆者やメディアの意見と自分の知識・経験を融合して根拠を挙げている。	7	③自分が解決すべき問題として捉えており、自分の行動で問題解決を行う。	8

図2 【明証性】と【自己関与】の分析結果

分析すると図2となる。図2の結果として、「テキスト・メディアの意見を根拠」として用いており、その考えは「自分の問題として認識が不足」、もしくは「自分が解決すべき問題として捉えており、問題解決案を提示」しているものが多い。【自己関与】の観点から見ると、「自分が解決すべき問題として捉えており、自分の行動で問題解決を行う」という行動面は「明証性①」を除くとあまり見られない。やはり、自分の知識・経験から解決案を示すこと、特に自分の行動により解決するという考えを形成することは難しいと推測できる。

次の意見文は「明証性③・自己関与③」の学習者が形成した考えの一部である。

では、私たちにできることは何だろう。例えば、縁日で飼えないのなら魚は買わないなど、一人ひとりが気をつけることで少しは良くなるのではないだろうか。外来種は繁殖力が強く数を減らすには時間がかかると思うが、料理に使ってみたり、様々な工夫を重ね、今ある環境を守っていくことが大切だ。

この生徒は「私たちにできることは何だろう」と自己の問題として捉え、その問題の解決を試みている。この学習者のように自分の問題として捉えることは、「納得の属性」の【自己関与】に該当する。この【自己関与】を通して問題解決をすることは、学習者自身が「納得」のいく考えを形

くを占めている。これはこのテーマを自分たちが解決するための知識が足りないことにより、どのように自分たちの行動で解決できるかどうか思いつかないと考えられる。

前述の分類基準に基づき、【明証性】と【自己関与】の関連性を分析

成することへとつながる。その考えを広げ深めるためには、その形成した考えを【自己関与】と他の「納得の属性」とを関連させた指導が必要である。

4. 学習者の考えを形成・深化を促す指導の仮説

これまでの「納得」の検討と説明的文章指導の関係から、「納得の概念」の中でも【明証性】と【自己関与】に注目し、自分の考えを形成する説明的文章指導の構想は以下の三つの視点を取り入れる必要があると考える。

- ①自分の考えの不安定性を検討する場を設定する。【流動的】
- ②自分との関係を考え、緊密化させる場を設定する。【自己関与】
- ③自分の考えの根拠を確保する場を設定する。【明証性】

「①自分の考えが揺らぐ場」は自分の形成した考えを吟味する機会を設け、より納得のいく考えを形成することを目指す。「②自分との関係」は【自己関与】に基づくもので、自分との関係から考えを深めさせる。「③自分の考えに根拠をもたせる」は【明証性】に基づくもので、自分の考えをより説得力のあるものとし、他者の共感を得る考えの形成を目指す。本実践では上記①から③の視点を達成できるように複数教材を読む活動を取り入れる。この①～③の仮説から納得のいく考えを形成するための「支援」として何が必要となるか実践を通して検討する。

5. 自分の考えの形成・深化を促す授業の実践

5.1. 授業の概要

1. 対象・場所 京都教育大学附属桃山中学校2年(39名(うち19名が3.2の意見文分析に該当))
2. 期日 2017年10月23日～26日
3. 教材(資料)
 - ①「変わる動物園」(『中学校国語1』学校図書)、②「オオカミを見る目」(『新しい国語1』東京書籍)、③「悠久の自然」(『伝え合う言葉 中学国語2』教育出版)、④「ガイアの知性」(『伝え合う言葉 中学国語1』)、⑤「循環

型社会とは何か」(『中学生の国語二年』三省堂)、⑥「この小さな地球の上で」(『中学生の国語一年』三省堂)

4. 目標

- ・生態系の問題について、自分たちにとって密接に関わりのある問題として捉える。
- ・多様な考えに触れ、その考えを吟味し合い、納得度を高めた考えをもつ。
- ・納得度を高めるために、自分の考えに対する理由と根拠を明確にする。

5. 指導計画 (全3時間)

時	授業内容
1	・昨年度の作成した意見文を確認する。
	・課題「自分ができる最も良いと思う生態系を守る方法」について自分の考えとその考えに至った根拠を書く。 (自分の考えの形成Ⅰ)
	・グループでそれぞれの考えの「良い点」と「改善点」を指摘する。
	(宿題)「配布した6教材の中から最低2教材読んでくる」
2	グループで、宿題で読んだ教材の内容を確認し合う。
	(1) ニュースや新聞で知った生態系に関わる問題について考える(身近な問題も可)。
	(2) グループの人数分の課題に対する考えを書く。 (自分の考えの形成Ⅱ)
3	・グループで出し合った課題に対する答えと、グループの中で最も納得のいく考えを発表する。 (自分の考えの形成Ⅲ)
	・課題について、これまでの活動を踏まえ最も納得のいく考えを個人で書く。 (自分の考えの形成Ⅳ)

本実践では「納得の概念」に基づき課題を設定した。とくに【明証性】と【自己関与】を軸とし、それらとの関係を考え、内容の理解度に関わる【理解の深化】や協働性に関わる【信頼関係】を高める課題や環境を設定した。また「腑に落ちる」という【感情的受容】、損得を検討する【相対的利益】、時間や活動により変化する【流動的】の三つの属性は単元中

に常に起こりうるものと想定する。またグループで考えを形成する場合も含め自分の考えを形成し吟味する機会を各時に設定し、自分の考えを深めることを目指す。

5.2. 実践の分析と考察

それぞれの学習課題を分析し、考えの形成・深化する過程を考察する。

5.2.1. 第1時

昨年度の形成した考えは「生態系は人間によって破壊された」や「動物たちや自然をこわしていつている人間が一番こわい」のように人間の行いを省みる考え、「外来種も一つの命なので大切にすべき」や「生態系を守る」など生態系と関連付けて「未来への影響を考える」や「行動をみつめることが大切」などの解決を提示している。それらの考えを提示した後、課題として「自分ができる最も良いと思う生態系を守る方法」について理由も合せて考えさせた。この課題で形成された考えは「ペットを自然などに身勝手に逃がさない」、「外来種を食べる」、「正しい知識を持ち、活動に協力する」などがある。この課題では「自分たちができる」という【自己関与】を喚起する設定で行っているので、学習者が実行できそうなものが挙げられている。

これらの考えをグループに分かれて「良い点」と「改善点」を挙げさせた。「改善点」に着目すると、「ペットを飼っている人の事情も考えるべき」のように他者意識の視点や「外来種は本当に食べられるのか」「活動をしている公共機関があるのか」など事実の確認を求める意見が見られた。第1時では個々が【自己関与】と関わらせて考えを形成しているが、他者に納得してもらえるほどの【明証性】が備わっていないので、現時点では説得力のある意見とはいえない。より質の高い考えを形成するために【明証性】を充実させることが求められる。

5.2.2. 第2時

複数の文章を読み、多様な考え方に触れさせ【明証性】を高めることを目指す。各自が文章を読み、そこから形成した考えを他者と共有でき

るようにワークシートに感想を書かせた。ワークシートから見られる考えの傾向として、「変わる動物園」、「悠久の自然」、「ガイアの知性」、「この小さな地球の上で」から人間と他の動物や自然との関係を考えてものが見られる。また「オオカミを見る目」、「悠久の自然」、「ガイアの知性」を読んだ生徒は新たな考え方や知識を獲得した認識の拡充が見られる。【自己関与】に着目すると「循環型社会とは何か」では「3R」や自分たちの「小さな行動」など、現時点で自分たちにできることを考える感想が見られた。

この新たな認識を活用させて、グループで第1時と同種の課題「生態系を守るために私たちができる方法や行動を考え、具体的に説明する」に取り組ませた。各グループ三つから五つほど納得のいく考えを出すように指示し、考えの拡充を目指した。

本実践の学習過程は、複数テキストを読み認識を広げ、その認識をグループ活動により拡充させ【明証性】の質を高める。そして拡充させた考えを【自己関与】と関連付け問題解決することを意識した。

この学習過程を踏まえ、ここでは二つの班（A班、B班）の活動成果を示す。下表はA班の成果である。

自分たちのできる方法・行動	考えの理由・根拠
①食べることの出来るものを私たちが食べる。また、おいしくいただける方法を考える。	・外来種でも、命は大切なものなので、食べることによって無駄にはしない。 (「この小さな地球の上で」より)
②研究をして対策をとる。また新しい考えをもつ。	・他の見方を考えることによって対策をしていくべき。 ・研究によって、今までの考えをくつがえす。 (「オオカミを見る目」より)
③ごみを減らすための3Rを心がける。	・3Rは私たちでも簡単にできることから。 (「悠久の自然」より)

④私たちの生活と他の生物との共存について考える。	・自分の頭で考えることによって、自然に対する考え方が代わってくると思ったから。 (「悠久の自然」、「オオカミを見る目」より)
--------------------------	---

A 班は配布した教材をもとにそれぞれの考えと根拠を挙げている。「食べることの出来るものを私たちが食べる」という考えは、第1時の課題「自分ができる最も良いと思う生態系を守る方法」で形成された考えであるが、その根拠を教材から作っており、自分の考えを補強している。他の考えは教材をもとに形成された考えであり、個々が読んできた資料をグループで共有することで考えの拡充が見られる。下表はB 班の成果である。

自分たちのできる方法・行動	考えの理由・根拠
①人間が一番偉い考えるのではなく自然に耳を傾ける。	・人間達の知性は攻撃的な知性で、他の動物の持つ受容的な知性も大切にすると、地球を大切にできる。(「ガイアの知性」より)
②動物に対して色々な視点を持ってみる。	・動物は時代や場所によって同じ動物でも見方が大きく変わるので、その見方が変化するという事を心に留めておくことで、動物を守ることにつながるから。(「オオカミを見る目」より)
③3R を徹底する	・地球温暖化が進みにくくなり、気温上昇による生態系の破壊・変化も防ぐことができるため。 ・廃棄物の削減で資源を無駄にしないようにすることで、生物の環境が破壊されにくい。 (「循環型社会とは何か」より)

④身近な自然を全て保護するのではなく、地球の一人一人が自然を少しずつ保護する。	・忙しい日常で自然に思うのは、難しいが少しずつならできると思うため。 (「悠久の自然」より)
⑤動物の生きる権利と自然の価値について考える。	人と自然の様々な側面について考えられるため。 (「変わる動物園」より)

B 班の考えも A 班と同様に、複数の教材を参考にしてそれぞれ考えを示している。A 班と異なり、この班の意見は第 1 時の課題「自分ができる最も良いと思う生態系を守る方法」にはない意見のみが出されている。

両班とも個々で読んだ資料をグループで共有し、考えの拡充を実現している。これは複数のテキストを用いることで考えを拡充できた一例であり、複数テキストの多読による【明証性】の質的向上が見られる。さらに【自己関与】の視点から様々な見方・考え方を共有することにより【自己関与】と【明証性】の結びつきが強くなり、より深い考えの形成が可能となる。

5.2.3. 第 3 時

第 3 時では、各グループの発表を聞いて、一番良いと思う考えを選ばせた。以下の考えは各グループが選んだものである (全 10 班)。

- ・イメージを変える ・釣り大会 ・3R を徹底する
- ・一発喝を入れる ・研究に役立てる。
- ・川の水をきれいにするために、家庭で使った水をできるだけきれいな状態で流す
- ・むやみやたらにそこらの生き物を捕えない。
- ・川などを汚さないために油などをそのまま流さない。
- ・ペットは最後まで飼えないなら飼わない。
- ・食べられるものを食べる。美味しく頂ける方法を考える。

「自分たちができる」という【自己関与】に基づく条件なので、各班が出した考えは自分たちができる実行可能性の高いものが多いと考えられる。「イメージを変える」という意見と「3R を徹底する」が生徒にとって共

感できる意見として選ぶ生徒が多かった。これは、今の自分たちができるといふ点から共感を得たと考えられる。

5.3. 考えの形成・深化の過程分析

学習者2名に焦点を当て、【自己関与】と【明証性】が考えの形成・深化に与えた効果を分析・考察する。ここでは本単元の最終課題とした意見文を中心に上げ、他の課題との関係性も合わせて見る。

私は、生態系を守るために、外来種の生物を食べる、という方法が良いと思った。なぜそう思ったのかというと、「この小さな地球の上で」で述べられている「100年生きる人間でも、他の生き物でも同じ生きがい。生命の重さは全て同じ」ということから、たとえ生態系を破壊する外来種の生物でも一つ一つの大切な命であり、その命を無駄にしてはならないと思ったからだ。

今まで、生態系を破壊する恐ろしい生物として大量の外来種の生物が「駆除」されてきた。この方法だと、ただ命を無駄にしてしまうことにすぎない考える。だからこそ、悪いものから、むしろ私たちの生活のプラスになる良いものになるように「食」として取り入れていくべきだと思った。ヌートリアなどは肉が美味しいらしいのでとても良いと思う。さらに、ヌートリアは毛皮も食の他に「衣」の形で活用させることができるので一石二鳥だと思った。

「人間も他の生き物も。生命の存在ということについては、全く平等だ」、この文章も「この小さな地球の上で」の一部である。私はこの文の著者である手塚治虫さんから、小さくてもかけがえのない命であることを考えさせられた。だからこそ、外来生物の命を無駄にしてはならない。

この生徒（前述のA班に所属）は、第1時の課題と同じ「外来種を食べる」という考えを述べているが、第1時時点での理由は「命を無駄にしてはいけない」とのみ挙げている。その後、この生徒が考えを広げるために、「この小さな地球の上で」「循環型社会とは何か」「悠久の自然」「オオカミを見る目」の4教材を読み、自然の素晴らしさや大切さ、命の大

切さを学んだ。とくに「この地球の上で」では「普段食べているお肉やお魚も一つの命にすぎない」という考え、「循環型社会とは何か」では「一人一人の取り組みによって社会を良いものに変えている」という考えを学んでいる。

この生徒は、すでに形成した自分の考えを説得力のある意見にするために根拠の質を、多読を通して向上させることに取り組んでいる。A班としての活動では複数のテキストからはもちろん、他者の考えにも触れて考えを広げ、必要な情報を選択し納得のいく考えへと深化させている。つまり、テキストから得た見方・考え方を他者に共感してもらうことにより【明証性】を高め、より説得力のある考えへと深化させた。「納得」の観点からは、この生徒は【信頼関係】を通して【明証性】の質を高めたといえる。

最も良いと考える方法は、まず多くの人が生態系を守るということを意識するということだが、最も良いのは、生活の中で3Rを意識することと考えた。電気を節約(リデュース)すれば、約3割程を発電している。火力の需要が減り、CO2排出量も減らせる。次にリユースだ。マイボトルなどで必要以上にものを消費しない、そしてリサイクル。古紙などをパルプの代用として再利用します。しかし、リサイクルには他のものを代わりに消費します。なので、日常の中で無駄なものを発見し、見直すというのが手頃なリデュースだ。そうして、循環型社会を目指していくこと、サステナブルな社会を目指すことが大切だ。このことにより環境問題の対策となるからだ。そのためには、前述した多くの人がそういった意識を持っていくようにしていくべきだと思った。

この生徒は、第1時の課題と異なる考えを述べている。この生徒は第1時では公的機関に通報したり、活動への参加を挙げている。しかし、グループで意見交換をしたとき、「改善点」として「参加するのか、通報できるのか」、「そのような公的機関があるのか」という指摘があった。これは【流動的】が該当し、この「納得の属性」により自分の考えを再構成することが求められたと考えられる。つまり、形成された考えを再構築することによって、納得度を高めることができる。その後、B班としてのグルー

プ活動を通して、考えを広げ、納得のいく考えの形成が見られる。この生徒は、「オオカミを見る目」より人間の見方の変化に着目し、【自己関与】の観点から「循環型社会とは何か」の筆者の考えを基に納得のいく考えとして形成している。つまり、グループ活動により拡充させた考えを【自己関与】を軸にして【明証性】を高め、自分の考えを形成した。

上記の生徒二人の考えを「納得」の観点から考えると、始めに形成した考えをより「納得」のいく考えとして深化させた者もいれば、形成した考えの再構成を通して、より「納得」のいく考えを形成・深化させた者もいることが分かった。両者とも【自己関与】と【明証性】を軸に他の「納得の属性」との関連により、第1時で形成した考えをより「納得」のいく考えとして表現したと考えられる。

6. おわりに—成果と課題—

「納得の概念」に着目し、自分の考えを形成する説明的文章指導を行った。成果として自分の考えを形成する機会を単元内で複数回設定することで、より納得のいく考えを形成させることができた。さらに、自分の考えがより他者に説得力のあるものになると同時に学習者自身もより納得のいく考えの形成へと繋がった。複数教材を読み、理解を深め、他者と考えを共有する場を作ることは【明証性】を高めることにおいて有効であることが確認できたことから、【理解の深化】と【信頼関係】に基づく指導は【明証性】を補強する方法として有効である。ここに看護学における「納得の概念」理論と「意思決定支援」理論を援用した成果が認められる。

【自己関与】の面では、学習者は自分の問題として捉える姿勢が身につき、より現実に即した解を作ることができた。

【明証性】の面では、多読を取り入れることで複数の考えを学び、自分の経験を結びつけることにより、説得力のある根拠を導くことができた。

【理解の深化】の面では、一つの教材だけでなく、複数教材を使うことで、課題に対する理解を深め、【明証性】の質を向上させ、自分の考えの根拠を補強することができた。

【信頼関係】の面では、学習者同士の対話を通して、【理解の深化】の

質を高めることができた。また自分の考えの説得力を高めるため【自己関与】と【明証性】が他者を納得させるものか検討することにより、自分の考えを深めることができた。

今後の課題として【自己関与】の質が考えの形成に与える影響の解明が挙げられる。本実践では【自己関与】が「納得」の質を上げ、考えの形成・深化を図ることができると考えた。たしかに自分の問題として考えることで問題解決的に課題に取り組むことが可能になった。また「意思決定支援」の観点からも【自己関与】を高めることは重要である。しかし、学習者の中には「私たちにはできることが限られている」という授業の感想があり、【自己関与】の質が考えの形成・深化を制限している可能性がある。学習者の問題に対する価値認識が納得の質に関わるとして、この【自己関与】の質を把握し、それに基づく「支援」が必要となる。

(京都府立福知山高等学校講師)

【参考文献】

- 富山哲也 (2017)「単元を通して様々な工夫をすることでアクティブな学習を実現させる」『教育科学国語教育 六月号 総力大特集 国語科授業に活かす新学習指導要領キーワード事典』明治図書 p.p16-19
- 吉川芳則 (2013)「説明的文章の領域における実践研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書, 201-208
- 今井芳枝・雄西智恵美・板東孝枝 (2016)「納得の概念分析－国内文献レビュー－」日本看護研究学会雑誌 39 (2), 73-85
- 中山和弘 (2012)「医療における意思決定支援とは何か」中山和弘、岩本貴編『患者中心の意思決定支援—納得して決めるためのケア』中央法規 p.p11-42
- 川崎優子 (2017)「看護師が行う意思決定支援の技法 30—患者の真のニーズ・価値観を引き出すかわり」医学書院
- 植山俊宏 (2003)「説明的文章における〈対話〉の基点—〈説得的表現〉への反応力育成一」全国国語教育実践研究会編『〈対話〉をキーワードにした国語科授業の改革 No.249』明治図書, 192-198
- 辻村敬三・植山俊宏・櫻本明美・田中真紀・辻村重子・三浦和尚 (2017)「『科学的読み物』に対する学習者の反応」大阪成蹊大学紀要第3号, 221-231
- 佐伯胖 (1982)「考えること教育」国土新書
- 佐伯胖 (1995)「子どもと教育「わかる」ということの意味 [新版]」岩波書店